

第8回 今後の県立高校の在り方検討委員会 議事録

日 時 平成28年12月15日（木）

13:30～16:10

場 所 サンラポーむらくも 彩雲の間

1 会長あいさつ

皆さん、こんにちは。年末のお忙しい中を、きょうは全員出席ということで、何かあるのかしらと思うような状態でございます。

気がつきますと、12月もあと残すところ16日余りということになりまして、いよいよ大河ドラマも最終回ということになってまいりました。

きのうでしょうか、きょうというべきでしょうか、第192回国会も会期を延長しながら、事実上終了ということになりました。TPPとかカジノとか、さまざま紙上をにぎわしている法案が通過した国会でしたが、私ども教育の立場から言いますと、非常に大きな法案改正が通過しているのですが、余り新聞紙上では取り上げられていないようです。それは教育公務員特例法の改正ですが、これを前提としてさまざまな国の教育改革（特に教員の資質向上に関わる改革）が進んでいるところです。このことは前回から申し上げているように、学習指導要領の改訂とも非常に大きく関連しています。そうした国の大きな動きを一方で踏まえながら、島根県の地域教育の一つの帰結である高校教育をどのような今後の10年間を見通した設計にしていくべきなのかという、少し大枠の議論をしませんかというところに前回少し舵を切らせていただいたと思っております。これからさまざまにやっていかなければいけないことがたくさんありますし、既存の情報というよりは、新しい情報を取り入れながら議論をしていきたいと思っております。

我々の任期は基本的に2年間ということになっているようでございます。そのことを考えれば、我々の委員会の最終回をどのあたりに持ってくるかということも少し考えなければならぬ、そういったご提案もきょうはさせていただこうかと思っております。

限られた時間でございますので、早速に始めさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

2 議事

【議題1 今後の議論の進め方について】

〔資料3、4を肥後会長より説明〕

<意見交換>

○委員

学習指導要領の問題をこの会でどのくらい扱うのか、間もなく中央教育審議会の答申が出ると思うが、そのあたりどう考えれば良いか。

○肥後会長

前回お示しした資料に、次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめということで、8月26日に中教審教育課程部会から出た報告を出している。恐らくこれを大きく外れる答申は出ないと思われるので、これを踏まえた上で、細かいところに立ち入るのではなく、枠組みとしてこういった精神というか、こういう感じで高校が変わるとしたらというぐらいで良いのではないか。学習指導要領そのものを、例えば各教科がどうなるかとか、あるいは職業科の科目が今度どうなるかというテクニカルな部分には踏み込まなくても良いかと思っているが、議論によっては拡大するループが必要になる場合もあると思う。

○委員

学習指導要領が答申されたら、当然各学校もだが、公立の場合、教育委員会がそれに対していろいろ考えて取り組みをスタートされると思うので、まず、学習指導要領そのものよりも、それを県の教育委員会がどう受けとめられ、それをこう生かしていくというところから議論したほうが、議論が具体的になるのではないかと思う。これから答申が出るので、教育委員会から新しい学習指導要領についての考えを求めても、出せるものも少ないのかもしれないが、そのあたりはどうか。

○肥後会長

これは県教委には県教委の考えがあると思うので、それはまたお示しいただける機会もあるかと思う。それから、文部科学省も当然ながら、学習指導要領の改訂のポイントを示されるであろうと思うので、そのことを踏まえて県は動かれる、それはご指摘のとおりだと思います。

資料3の図の中に、教育は中央からと書いたが、教育は中央からという見方が既定の路線である。そう考える面も必要であると同時に、それ以上に地域にとって必要なことは何

かということ踏まえながら議論するというスタンスなので、学習指導要領を県がこう解釈する、だから検討委員会ではこうするという、その流れだけではないという提案でもある。

具体的には、学習指導要領を踏まえたさまざまな施策に予算がつき、それがどうなるかという具体の問題が当然動き始める。そこはそことして県は踏まえられると思うので、それと違うことを提案してもご迷惑な点はあろうかと思う。ただ、前回は発言があったように、ここの議論はここの議論としてやれば良いのではないかと発言いただいたので、そのようにやらせていただこうと思う。

○委員

先ほど会長から資料4の説明があったわけだが、私はタイムリーな提案だと思う。実は私も、主人公である子供たちがどう考えているのだろうかということが今まで全く議論の中で抜け落ちている。その上で議論しても、やはり完全なものにならないだろうということがあり、高校生の実感とかを聞く機会を提案させていただこうと思っていた。教育魅力化という言葉も出たが、これも子供たちが主人公だから、その辺のことを踏まえないと議論ができないだろうということで、私は賛成である。

○委員

飯南高校と島根中央高校の視察という話、大変良いことだと思うが、この両校を選択された理由を確認したい。

○事務局

委員から学校視察、あるいは意見交換会の機会を設けて欲しいとの要望を受け、会長と相談をしながら大枠を決めさせていただいた。今回、委員の皆様にご了解いただければ、早速具体化したいと考えている。

魅力化校8校の中から選ぶという前提のもと、あらゆる地域から委員の皆さまにお越しいただいていることも踏まえて、距離的、物理的な部分も含めて、飯南高校、島根中央高校を選択した。両校とも魅力化・活性化事業の中で大きな成果を上げている学校でもあり、また、一部の委員から寮の話も出たが、寮も見ただけなので、そういった意味で飯南高校と島根中央高校を選択した。

当初は、会長の話にもあったように、委員全員で移動し、2校を見学、視察できればと考えたが、2月という冬のシーズンの中で、朝早くから出発をすることは困難なことが多く、受け入れ側の学校も、20数名の視察団を受け入れるのは難しいと判断した。飯南高校

グループと島根中央高校グループに分かれて視察し、単に学校視察だけではなく、学校関係者はもちろん、町の関係者、あるいは生徒の代表等も含めて、委員の皆様と意見交換をしていただければと考えている。

これで良ければ、具体化する時にはいろいろ希望をとりたいと思うが、基本的に西部の方々に配慮し、大田市駅にもバスを寄せていこうと考えている。また、常々、松江市のみの開催だったので、これを機会に検討委員会を大田市で開催できればと考えている。

○委員

私から2点。1点は、先ほど委員がおっしゃったように、子供が主体であるということをお忘れしないで、今後検討できたらと思う。

もう1点は、石見で学校現場等の声、あるいは地域の声等、直接聞かせていただいた。この検討委員会が終わりに、どんな検討委員会だったかと聞かれたときに、とにかく現場の生の声を直接聞くことを大事にした、これには限度はあると思うが、いろいろな資料をもとにしながら、生の声をできるだけ聞いて、それを反映させて答申を作ったと言えるようなものにできたらと思う。

○肥後会長。

確かに限度はあるが、できるだけその姿勢を持ちながらやっていきたいと思う。

お忙しいスケジュールの中だが、今、資料3に書いた基本的な進め方についてご了解をいただき、そして資料4にあるスケジュール感で進ませていただきたいが、お認めいただけるか。

(全員賛成)

では、この形で進めていきたいと思う。

【議題2 教育魅力化による日本創生～進化・増殖し続ける学びの生態系づくり～】

[資料2を学校魅力化プラットフォーム 岩本悠氏より説明]

<意見交換>

○委員

私も高校の魅力化・活性化に初期のころにかかわったことがあるが、そのとき非常に残念だと思っていたのは、中心になっているのは担当した教職員が数名で、本当は一番の主体である生徒が、こんな学校にしたい、こんな魅力的な学校に自分の学校をしたいとか、

こうしたら自分のためにもっとすてきな学校になるのではないか、友達のために、あるいは地域のために良いのではないかということが発想するところが少なく、一部の先生が考えたことをやっていた。それも全校生徒、全教職員に伝わっているかという、担当者だけで終わっている現実があった。写真を見て、子供たちが生き生きと活動していると感じたが、その辺の現状はどうか。

○岩本氏

現状は、おっしゃるとおりである。大人主体の魅力化になっている。しかも、まだ一部であるという現状がある。

それに対して、新たな動きとして、生徒主体の魅力化を進めていこうとしている。生徒たちがその学びの主体であり、学校の主役であるとしたならば、自分たちの学びの環境を自分たちの手でより良くしていきたい、自分たちにとっての学びを豊かにしたい、そのように学びを生徒たち自身の手に取り戻していくというような発想とあわせて、生徒による魅力化という動きが始まっている。生徒たち自身が自分たちの学校の課題を発見し、解決策を提案、提言していく。それを生徒会とか教員と対話や協議しながら、場合によっては地域の方たちにもお願いしながら、学校づくりをやっていこうという動きが今起きている。ことしは2回ほど、こういう生徒中心による魅力化の合宿を町村の負担で実施している。そういった高校生たちが一堂に会して、自分たちの学校をこうしていきたいということを、一部、先生たちにも入っていただきながら考えて、それを学校に戻って、生徒会や学校の先生たちと一緒にやって、またそれを持ち寄ってどうだったということをネットワークしながら進めている。

これがいわゆる主権者教育のようなもの。ただ模擬選挙をすれば良いという発想を超えて、自分たちの生活や環境やコミュニティーを自分たちの手で主体的により良くしていく。一番身近な環境であるこの学校というコミュニティーに対して、今まで学校も、地域の課題解決などをやりなさいと言って地域には出すが、身近なこの学校の教室の問題、この学びの在り方の問題、そこに対して生徒たちは、それは教員が考えるべき、学校が考えるべき、大人がやるべきだと、この発想があった。今、根本的に学びの在り方を見直していこうというのが、離島・中山間の高校での魅力化の中で生まれてきている新たな芽生えかと思っている。

○委員

そのこと自体が子供一人一人の暮らしに、生きて働く力をつけることにもつながると思

い、魅力化のために生徒に頑張りなさいという話ではなく、生徒一人一人のためにも非常に大事なことだと思う。

○委員

日本財団の資金で何をするのか、フレームがいま一つよくわからない。この主体はどこで、どういうアウトプット、何を生み出すために資金を得て、そして、期間はどのくらいでされるのか、プロジェクトの概要を教えてください。

○岩本氏

概要としては、期間は2017年、来年から3年間である。主体は、まだ仮称だが、教育魅力化プラットフォームという、イメージとしては産官学の協働のプラットフォーム的なもので取り組んでいく。アウトプットとしては、こういう教育を核にした地域創生を全国に広げていくということがこのプロジェクトの大きなテーマになっている。島根県に広げるというよりは、島根県も含みながら、島根県をさらに超えて、全国にも広げていこうと、こういうところが日本財団がこの事業の価値を評価したポイントになっている。

広げるためには一部の、先ほど言った変態系というか、すごい先生がいるからできたのだとか、あれは島だからできた、山だからできたではない、システムの変革までつなげていかない限り、個別の動きで終わる。そういう教育観自体が、学校と地域のかかわり方、在り方自体を変えていこうという動きだが、それに伴った教員の育成システム、評価システムを開発し、その開発されたものを市町村や各学校や、場合によっては都道府県が使える、もしくは使いたいと思ったものを活用していくという、そういうたてつけになっているもので、形上は県の教育委員会とは別組織で、別の主体としてやっていく。

○委員

島根らしい魅力化の何かヒントみたいなものがあつたような気がするが、現実、高校には決められた単位数があると思う。話を聞いていると、高校を飛び越えて、大学のゼミでやっているような感覚の動きのような印象も受けたが、履修しなければいけない単位数と地域とのかかわりのバランスは現実的にどうか。

○岩本氏

実際のところ、地域課題解決型学習が一体どの時間で行われているのかというと、ほぼ、どこの高校も総合的な学習の時間を使っている。大抵3単位で、特に、1、2年生を中心にやっているところが多い。

学校によっては、新たに学校設定科目を作っているところもある。県内のある学校では、

教育課程の特例をとって、家庭科、保健、情報の教科をくっつけて、地域を舞台にプロジェクト型で学んでいる。健康や福祉、家庭や保健等にかかわるテーマを探究的に学びながら、そこに情報での知識、技能を活用した、そういう教科横断型の学習を地域を舞台にやっている。

基本のいわゆる主要5教科の時間は、どの高校もほとんどいじってない。それ以外の時間でやっているというのが現実である。あとは放課後、先ほど言った部活動のような枠組みを使っている。海外でプレゼンテーションを行っている高校では、英語の時間の中で自分たちのやってきていることを英語にし、それでコミュニケーションがとれるようにするといった、教科と一部連携する形をとっているところもあるが、時間数的には変わっていない。

○肥後会長

学習指導要領そのものが変わったときに、各教科の時間との配分がどうなるのか、この間、島根県でも学力育成チームが出した解説版もあったが、それとの違いはどうか、結局総合的な時間だけなのでしょうみたいな話など、そのあたりをどう考えるかが非常に大事で、国の決めた制度設計の枠の中でいくのか、その枠ぎりぎりいっぱい外に伸ばして行って、各教科と渡りをつけてそこを突破していくのがテクニカルには重要と思う。

○委員

気になった点が2つある。1つが、私も現場の先生方と話していて、正直温度差があると感じている。この魅力化という取り組みに価値を感じて、やはりいいとされる先生と、価値はわかるがどうしていいかわからない、正直よくわからないといって距離を置いている先生がいる。その意識がこれから魅力化を考える上ですごく大事だと私自身も感じている。研修システムの話があったが、今、考えている方向性があれば、お聞きしたい。もう一つ、私も高校魅力化を取材してきて、今の魅力化の取組、高校を中心にすごいと思うが、やはり高校は高校だけで存在しているわけではない。大学入試が大きく変わろうとしている中で、高校入試はどうなっているのか、中学も含めた方向性について考えをお聞きしたい。

○岩本氏

現場の教員と話をしていても、先生方もこれからの地域や社会に開かれた教育課程だとか学校とは一体どんなものなのか、どうやっていくのか、もしくは地域との協働は必要だ、あったほうがいい、全部が学校に来る中で、どうやってその地域と一緒にやっていくのか、

頭ではわかるけど、どうしていいのかよくわからない、どうやっていいのかわからないという声がある。例えば地域の課題解決型学習、これから本当に求められる資質、能力のために、今までの狭い意味での学力を超えた力が必要だとわかって、それをどうやって育てて良いのかわからない。課題発見解決型も、自分自身もそういう学び方をしてきていない中で、どうそれを生徒に提供して良いのかわからない。もしくは、そういう学びをどう生徒の学習意欲だとかキャリアデザインだとか、もっと言うと、教科学力との相互関係の中でそういった学びを提供できるのかわからないという声は非常に強い。どうしたら先生たちにそういった力ややり方が手に入るのだろうか、どうしたら良いかはわからないので、ぜひ今後こういった場でも、学校の在り方に伴って、学校のこれからの方向性だとか在り方を議論される中で、教員の役割がどう変わるのか、どのように教員もそれに対応できるようにしていくのか、そんな話も今後ぜひ出てくると良いと思っている。

2つ目の評価について、その中でも入試の話があったと思うが、高大接続の中でも、入試だけが変わってもいけない中で、高校、その接続の部分、大学、この三位一体の議論がされてきている。この場での高校の在り方も、アドミッションポリシーとして入り口でメッセージを出していくのか、もしくは、高校だけが変わればいいのか、もっと言えば中学校もこれから変わろうとしている中で、中学校と高校の連続性だとか変化の在り方を、島根県を考えたときにどうあるべきなのか、本当はその議論があると良いと思う。議論をしてつくっていく必要があるとは思いますが、どういう方向なのかはまだわかっていない。

○肥後会長

アドミッションポリシーという言葉が出たが、大学の場合は、こういう力をつけたい人に来てほしいと本当は言わなければいけない。ところが、今、言っていることは、「こういう力を持った人に来てほしい」である。だからそれを「こういう力をつけたい人に来てほしい」と言いかえなければいけない。うちの大学にはこういう力をつけるためのこんなプログラム、あんなプログラムがあるからと、こう言わなければいけない。それが今、実は言えてなくて、基礎学力を持った人に来てほしい、何々を持った人に来てほしい、こういう言い方である。本当は教育の仕組みから言えば、こういう力がつくから、こういう力をつけたい人に来てほしい、こう言わなければいけない。だから、例えば高校も、今後こういう力をつけたいのであれば、うちの高校に来てくださいと言わなければいけない。

○委員

大学入試は国が管轄している。高校入試は県が管轄している。まだアドミッションポリ

シーを言って高校入試をやっている県は多分ないと想像するが、選択肢というか、可能性としてはあるか。

○肥後会長

実際の仕組みとしてどう落としていくかは県が考えることだと思うが、私どもの議論の中で、高校が一校一校魅力ある存在になっていくのだとしたら、うちの高校に来るとこんな力がつくから、こういう力をつけたい人はうちの高校に来てくださいとそれぞれの高校が言うようになれば、それはとても魅力的なものになる一歩ではないか、この委員会で考えても良いのではないか。

○委員

それは今お聞きして共感した。高校入試の仕組みは、県で決められると言いつつも、ほぼ全国同じなのか。

○事務局

学校独自の学力テストを実施している県もある。島根県の場合は、学力検査については全部の学校が同一問題を実施しているが、県によっては、県がつくる問題と別の入試を実施している高校もある。

○委員

学力検査は共通でも良い。それ以外の要素で捉えるものがまさしく魅力化だと思う。例えば、学力とその他の要素の割合を各学校で設定する、これができるかという話ではないか。その点はどうか。

○事務局

昨年度までは学力検査については1教科100点満点で計500点だった。今年度からは1教科50点満点で計250点にする。それと、いわゆる中学校から出てくる個人調査報告書との比率については、自分の学校は学力検査を重視するという学校もあれば、自分の学校は中学校の活動を重視するという学校もある。そこは学校が独自に設定しても良い。

○委員

テクニック論的に聞いたが、国が大学、高校の教育を変える上で、大学入試を解決策の作用点として変えてきたところを見ても、魅力化も含めた指標として、インパクトを与える存在として入試は大きいと思う。

○肥後会長

入試のテクニック論というよりも、いわゆるアドミッションというものをどう考えるか。

島根大学も実は、地域貢献人材育成入試を始めた。そのときにやっていることは、結局のところ、地域貢献の活動の実績をプレゼンさせることで、大学に来たらその力がつきますとは言えない。そういうことをしてきた人はきっと意欲がある人だから、大学に入れましよう的なことを言ってしまうている。これではだめだと思うが、そういった入試の在り方を、今後大学も変えなければいけないし、恐らく高校も変える時代になる。何が良いかということとは、ここでイメージを出し合えば良いかと思う。

○委員

高校の先生やコーディネーターと話をする機会がよくあるが、島前も含めて、もっと繋がれば良いと思うことがよくある。そういう思いがある中で、「チームしまね」としてのチーム力が高まってきていると話されたが、具体的に一体どういう形で成果が挙がっているのか。どういうところが育っているのか、伸びてきている思うポイントがあるのか。

○岩本氏

離島・中山間地の高校魅力化事業を実施している町村は、年何回か集まる機会が設定されていて、一方的な伝達事項だけではなく、どちらかという熟議とかワークショップ形式で、本当にどんな課題があるのか、それに対して、うちはこういう方法で取り組んでいるとか、寮の問題でこういうのがあるが、それだったらこういう方法があるとか、こういう資料を作ったから送るとか、年数回だが、そういう場によってノウハウが共有されている。例えば寮もただの管理的な形になっていて、どうやって寮生活を通して生徒を育てるかというノウハウがないので、そこら辺を一緒に勉強しに行こう、ICTをうまく活用できていないので、講師に来てもらって研修をしてもらおう、ICTで生徒同士をつなぎ、生徒がもっと他校の生徒と交流したい、もしくは教員もそういうニーズがあり、複数校でそうすると、いろんな学校の生徒が集まって、そういう課題解決に関して切磋琢磨できるような場をつくらうとか。先ほど質問にあった、高校生主体の魅力化をしたいという声が幾つも出る中で、それ一緒にやろうよという形で、そういう対話の中でいろいろな企画が生まれてきて、一緒にやれるところから始め、もしくは各町村がお金を出し合って、そのお金でいろいろな高校の生徒にそれをやろうとかいって今やり始めている。こういう動きが離島・中山間地に限らず広がっていくと良いとは思っている。

○委員

主に、合宿で集まるのは、魅力化に取り組んでいる8校だけか。

○岩本氏

今のところはそうである。最近のほかの、離島・中山間ではないところからも、興味を持っている先生だとか、コーディネーターだとか、行政の方もうわさを聞いて、ちょっとずつ参加している。

○委員

行政もそういう場に希望があれば参加できるのか。

○岩本氏

今後こういった取組をやりたいと思っている市町村は、結構積極的に来られて、情報交換とか、今からでも一緒にやれないかとか、そういうつながりは生まれつつある。

○委員

地域総がかりで魅力ある人づくりへという、このイン、アバウト、フォー、ウィズという段階分けはとてもわかりやすい。小学生は地域でしっかり体験させてもらい、中学生になったら、それが行動として地域に何か一つでもいいから活動として貢献できる。その質が今度は高校生になって、より深くなって課題に向かうという、そんなところを目指していくというのはとてもわかりやすく、自分でも得心した。

高校生がそこを目指す、その前段階の中学生はどうかといったときに、総合的な学習の時間が入ったときに、今までやったことのないことを教員がするといったことで戸惑いはあったが、そこについては本当にいろいろな評価はあるが、確実にかつての教育とは違った力を子供たちはつけてきていて、それが今の生きる力であると思っている。

ただ、先ほどから話題になっていた高校入試の在り方として、その力を測れる部分が十分あったかどうかという点については残念に思うところもある。それが面接であったり、論文であったり、いろいろな行動の記録等で記したところではあったと思う。だから、そういう意味で、今改めてその力が今度は高校でも問われて、大事にされているのだという理解をして良いと思った。

一つ伺いたいのは、話が今までの流れとは逆行するが、高校生主体のという言葉がある。高校生主体の活動、魅力化ということがあったが、例えば実際、取り組みを始められたときと、それから、今こうやって、カリキュラムの中ではわずかな部分での取り組みだったということだが、そういう経験をした子供たちが主体的にかかわっていくと、子供たちの中で変えられる姿は、まず自分の中の学校の生徒会の活動もかなり変わるのではないかという期待も込めているが、どのように生徒自身の主体性が変わってきたと実感しているか、

教えていただきたい。

○岩本氏

各学校によって当然、生徒の変化は違うと思う。例えば生徒主体のといったときに、ある学校は、学園祭だったと思うが、ワークショップみたいな形で、自分たちの学校がこうなったらもっと良い、課題はこれだ、こういうことができないかということを考え、提言をつくり、その後、投票用紙、投票箱を持ってきて、模擬投票を行った。魅力化総選挙と名前がついていたが、本当に自分たちの意思で、どういうものを変えていくべきなのかを投票し、それを生徒会が受け、どうしたらもっとそこら辺を変えられるのか、そんなことを始め、少しずつできるところを変えていこうという動きがある。

他には、ある高校では、学校の中に2つの学科があり、意外とそこの交流が全くない。ここら辺の交流とかこの壁を何とか崩せないか、一緒に行事ができないかということ自分たちなりに考え、学校とも相談していこうという動きがあった。あと、県外から来た子と地元の子たちの間に溝があったので、そこら辺をスムーズにつなげられるように、チームビルディングを先輩たちが企画した、もしくは地域とつながる機会がないから、そういった場面をつくろうとか、そういった情報提供ができるようにしていこうとか、本当にささいなことかもしれないが、自分たちなりに自分たちの学校を変えていく取組も行っている。それはひいては、地域の課題発見解決をやってきた中で、その発想をもっと身近なところに向けてみるところにつながってきている部分もあると思う。

○委員

地元のことは地元のこと、学校のことは学校のことと分離しているのは本来の姿ではなく、それがつながっているのが本物だと改めて聞かせてもらった。

○委員

4点について。1点目は、島根における地域資源について、いま一度考えておきたい。2点目が、特別支援のニーズや学び直しの充実、こういった課題についての柔軟な対応とはどのようなことかについて考えてみたい。

また、教育長の話にもあるが、生き抜いていく力を身につけるためには、どのような取組をすべきかというところが3点目。最後4点目として、地域、企業に求められる人材、人材育成とはいうところ。きょう頂いた資料にもある“個性に応じた多様な学び”というところだが、不登校、退学、また前回の会議の時にも話のあった早期離職、そういった課題に向き合うためにも検討していきたい。

私は保護者の立場で、家庭での教育において、子供に我慢を身につけさせようという意識はないが、ポジティブな意味での辛抱を身につけることは大切だと思っている。何か課題、問題に向き合ったときに、「あっ、だめだ、私にはこれは無理だ」とすぐ思うのではなく、様々な角度から物事を見る力、ポジティブに考えられる角度で物事を見ることができる力を身につけてほしいと思う。そういうことが身につけば、学校や社会に出て、課題に向き合ったときに、生き抜いていく力のひとつになるのではないかと思う。

岩本さんが考える島根の地域資源とは何かお聞きしたい。

○岩本氏

いろいろあると思う。シンプルに言うと、地域のヒト、モノ、コト。コトの中には文化や歴史なども含まれる。

○肥後会長

今言っていた話は、地域にとって何が教育資源になり得るかとは私は書いたのだが、教育資源とは何かということは逆に言えば定義ができない。ただ、問題は、どういう教育をしたいかということが見えてきたときに何が資源として見えてくるかという話が出てくるので、こういう言い方にさせていただいた。

それから、特別支援教育、あるいは特別な支援が必要な子供に対する対応ということは非常に重要なことだが、私の気持ちの中では、学びの多様性という言葉の中に含ませていただいている。

それから、今後どんな力が必要になるかと書いている中に、教育長の言葉にもある、生き抜いていく力も入っているし、それから辛抱と今おっしゃったが、これから議論が出てきても良いのではないかと思う。

資料3の図の中になかったら、地域の企業がどういう力を求めているかという観点。今のところは大事なところなので、例えば地域の産業界がどういう力を求めているかについてのヒアリング、そういう意見を伺う機会は必要だとは思っている。

ただ、これがすごく難しい。たとえば大学では学生にこういう専門的な力をつけさせていると企業側に説明すると、企業側は、いや、それはわかるが、人に礼儀正しく接することができるか、コミュニケーション力とか、そういう力が要るのだと必ず言う。そういう意味では、聞かなくてもわかっているところがあり、それ以外のことを言ってもらえる会をどう設定したら良いのか、逆にそういうことを考えてみたい。

○委員

高校は、県立高校のほうが良いのか、あるいは市町村立高校だったらどんな問題があるのか。島根県の場合は松江市立女子高しか市町村立はないし、全国的に見ても高校の場合は、大規模市の市立あるいは地域合同の組合立の学校が一部あるが、基本的には公立の場合、都道府県立がほとんどなわけだが、法的に、高校は都道府県立である必要がどれだけあるのか全く私にはわからない。ただ、少なくとも海士のケースを見ていると、海士町立あるいは隠岐4町立のほうがもっと弾力的なことができるのではないかと思うが、そのあたり、岩本さんの考えが聞きたい。公立の場合は都道府県立が良い理由がもしあれば、教えていただきたい。

○岩本氏

何年か前に隠岐島前高校にかかわっていたときにも検討はあった。目的として、教育の地域主権もしくは分権かもしれないが、ある程度地域の独自性を出しながらやっていこうとしたときに、地域の方たちがオフィシャルにかかわれる、学校経営に参画できるような仕組みがなかった。制度としてはコミュニティースクールとかいろいろあるが、それも導入がない中で、どうやって県立高校と市町村が協働していけるのだろうか、もしくはもっと地域がこういう教育の場に参画できる仕組みや制度が持続可能なものになるのだろうかという中での検討項目の一つとして、市町村立や組合立という在り方も上がっていた。

なかなか難しいとなったのは、一つはお金。町村の財政で高校を維持管理できるのかというところがネックになり、運営費の9割を県が負担するというそのくらい柔軟な支援があればできるが、町村の財政負担だけでは難しいというのが当時の結論であった。

○委員

松江市には女子高があるが、やはり財政的な負担は大きい。教員は県から派遣してもらっているが、人件費は全部市が負担している。ただ、考え方によっては、市立ならではの小回りがきき、いろいろな柔軟な施策がとれるのではないかと私は思っている。

岩本さんに質問。こうして教育の魅力化を図れば、留学する生徒も増えて、それにつれて家族も増える。問題はその後UIターン者の増と出生率の増。島前も御多分に漏れず少子化で、ずっと生徒数も減ってきている。そのことも当然あるが、UIターン者が増えて、その子供が高校を出て、大学を出るのが平成29年か28年、ことしあるいは来年くらいには1期生が出てくると思う。そのことについて、彼らは帰ってくるのか、向こうへ勤める可能性があるとか、その辺、岩本さんはどう考えているか。それがうまくいかないと、

なかなか厳しい。岩本さんが考えられたこの改革は斬新で、素晴らしいが、私は長く息が続くようにならないといけないと思うが、その辺の見通しはどうか。

○岩本氏

意識調査もしていて、地域に対しての愛着だとか当事者意識だとか、もしくは将来の自分と地域とのかかわりだとか、もっと言うと、帰ってきたいと思うかどうか、ここら辺について調査をしているが、確実に、こういう取組をする中で変化、上がっているのが見えている。感覚的に言っても、恐らく帰ってきたいという子供は増えているし、Uターン率は島前で大体3割ぐらいだったが、今後も増えていくだろうと思う。帰るタイミングは、大学を出てすぐというよりは、海外を含め、いろいろ修業をして、自分で仕事を回していけるだけの力をつけてから帰ってきたほうが良いのではないかということ、島前では生徒と話している親や人は多いので、恐らく帰ってくる割合は高まる。しかも、それが前向きな意味で、うまくいかなかったからとか、長男だから仕方なくではなく、自分の意思で帰ってきて、ここでやりたいのだという、そういう子供は増えるだろうと思う。

島外、県外から来る子供に関しても、具体的に、私は保育士になって帰るとか、関東圏や都市部から来ている子供たちも帰りたいたいとか、もしくは海外でやっても絶対自分のふるさととしてかかわり続けたいということは言っているので、県外から来た子供も、ある数は今後戻ってくるだろうと思う。

来年度から卒業生調査を実施し、どう変わっているのかを、定性、定量ともにしっかり見ていこうと考えている。卒業生の多くは県外に、島大もいるが、県外が多いので、出ていってからのコミュニティ、彼らの多くは地域にまた貢献したい、かかわりたい、恩返ししたいと思っているが、高校を卒業して外に出た瞬間に、そういった情報とつながりが切れてしまう。18歳まではいろいろなチャンスがあった、もらえたのに、県外に出た瞬間に全く情報も来なくなり、かかわりを失ってしまうということを卒業生から聞いているので、これからは、そういう県外に出ている卒業生たちが、もっと地元とか母校とかかわれる、そういう機会をどうつくっていくのかというところが、重要な視点になってくる。そこら辺も含めてどう考えていくのかというのが、この魅力化の視点として出てくると思う。

○委員

ちょうど先々週ぐらいに隠岐島前高校の卒業生2人と東京で会った。2人とも就職は東京のベンチャー企業などにするが、その目的は、自分が将来、島に30歳ぐらいで帰って、

仕事をつくる、そのために東京で就職をして修業して帰りたいということを2人とも明確に言っていた。

○委員

地域で触れ合った人たちによって、子供の気持ちが変わってくる。親がどうのこうのという前に、地域の人たちと学校でどうかかわったかにより、子供は育っていくのではないか。

津和野町のコーディネーターの話だが、その始まりは4年前になる。最初は、地域との交わりが少なく、反発があり、コーディネーターのお金はどこから出るのだとか言われたことがあった。4年が経過し、HAN-KOHという塾で中高生の面倒を見たり、また、先生とコーディネーターの横のつながりがよくなったこともあり、今、高校生たちがどんどん自分の力を発揮して、有名な大学に入ったり、海外に留学したりしている。そういう経緯を見てきているので、良かったと私は思っている。

ただ、その中で、今後、コーディネーターがどのように資金をもらっていくのか。津和野高校だけではなく、他の高校にも広がっていくと私はうれしく思う。これから魅力化がどんどん進んで、子供たちが自分の自我を芽生えさせ、次のステップに進むチャンスを得る、その仕組みがいろいろな高校に広がれば良いと思う中で、やはり資金の問題があり、例えばコーディネーターのお金が国から継続的にもらえると良いと思う。コーディネーターと高校の先生と一緒にタッグを組み、やっていけるのであれば有望で、子供たちの将来に結びつくのではないかと思う。

○委員

ここで語られているような魅力化、特に総合的な学習の時間を使った地域課題研究等々、これを従来型の教科とつなげる、あるいは従来型の学力とつなげる場所ほどの程度見えているか、私自身の中ではまだ見えてないところがある。というのは、今の3年生は1年生のときから地域課題研究、2年生はグローバル課題研究という形でやらせてきて、さぞ成績が伸びるだろうと思っていたが、こんなことをやっていて成績が伸びるのかという質問に対して、どう答えるか。学力観が違えばそこまでだが、もう少し見える形にしていくことが重要かと思っている。

もう少し大きな言い方で、キャリア教育をやったから学力が伸びたというデータを私は見たことがない。そこのところをきちんと、評価のことも含めて理論構築をしていくことが必要かと思っていて、私も今取り組んでいることについてはまとめていこうとは思いますが、

岩本さんのアイデア、また我々のメンバーの考え方の中からその辺が見えてくると良いと思っています。

○岩本氏

大切な視点は当然幾つもあると思うが、手法論でいけば、総合的な学習の時間でやっている地域課題解決型学習の中にどれほど教科の知識や技能の活用場面だとか、そこを紐づけていけるのかという、その方向性の話と、もう一つは、教科の中でそうやって取り組んできている地域社会の課題に対して、どのように考え、判断し、表現していくのか。教科の中にもそういった地域や社会の学びと紐づけていく、そういう教科の指導観だとか、指導法が求められてくる。この両方があるって初めて生徒が、この教科で学んでいることが一体何につながっていくのかが見えてくる。そういう中で学ぶ意欲だとか、もしくは教科の学びに対する当事者意識が非常に高まっていくので、今後そういった指導法だとかを含めて探究が必要かと思っているが、非常に重要な論点だと感じている。

○肥後会長

結局最後は教員の教育力にかかわってくる。だから、高校の先生の在り方が変わらないと、何を議論しても何にも変わらないということになる。

それからもう一つ、学力観とか高校の3年間で何をどこまでやるべきなのかということが、当然ながら学習指導要領に縛られてはいるが、ただ、そこで求める結果がセンター入試の点ではないということだけははっきりした。では今度は大学で何を問うのかという、大学入試の在り方にもかかわっていて、結局、従来と同じ点数を聞いているのかという話になったら、恐らく先生方も、いや、そんな総合的な探求なんかにかまけていたら大変なことだという話になってしまう。だから、そのあたりが少し、大学側も高校側も教員側も一緒に取り組んでいかなければいけないというグランドデザインが、実は先ほど申し上げた第192回国会の法案の中に本当はあるのだが、その辺が実際どのくらい現実の姿として変わっていくのかという問題はあろうかと思う。

きょうはたくさんの情報量のある話をいただいた。2月には2班に分かれて視察になるが、天気によからんことを祈っている。

視察の話だが、あまり学校側の説明を伺うばかりの機会になってはもったいない。それはインターネット等で公表されているものを委員一人一人が勉強して出かけていただきたい。当日はやりとりをさせていただく時間を長くさせていただきたいし、できるだけ生徒の意見を聞きたい、また、教員の意見も聞きたいと思っている。その辺のやりとりの時間

を長くさせていただきたいと思っているので、委員の方々は、どういう質問で何を聞いてみたいかということ、まずその高校について調査をされてから取り組んでいただくようお願いしたい。

3 閉会あいさつ（片寄教育監）

長時間にわたり、ありがとうございました。

本日は、子供たちを主体に教育の魅力とはという方向でご議論いただきました。考えますと、子供たちが抱く夢、希望、高校に求めるニーズというのは、私どもの想像をはるかに超えるものがあると思っております。それをいかに最適で最大な公約数的にまとめていただくかと、そういう難しい課題が委員の皆様には新たに投げかけられたのかなと思っております。

次回の検討委員会では、学校視察や意見交換を踏まえて、より具体的な議論をしていただければと思います。

どうぞ、年がかわりますけれども、よいお年をお迎えくださいませ。今後とも引き続きよろしく申し上げます。ありがとうございました。